

深志同窓会々報

題字 中山久四郎
 (松中10回 文学博士)
 発行所 松本市蟻ヶ崎3-3-1
 深志教育会館内
 深志同窓会
 発行人 中嶋嶺雄
 編集 刊行委員会
 印刷 電算印刷株式会社
<http://www.mcci.or.jp/www/fukashi/>

年次会軸に活性化

節目事業の活動支援

定時総会で決定 支部取り組みも期待

ロマンの源泉である母校の同窓会をどう維持、発展させていくか。直面する重いテーマに、深志同窓会は昨年九月に開いた平成二十二年度定時総会で、年次会活動への支援を柱に活性化を図る方針を決めました。

具体的には卒業後、節目の周年事業を実施する年次会に一律五万円を支援することとしました。各地にある支部の活動支援には、年額四万円を充てます。年次会の取り組みと、地道な活動を続ける支部組織を絡め、同窓会の未来を戦略的に切り開こうとの狙いで、総会の議事でも活性化対

策をめぐる意見が交わされました。同窓会各支部はこれまでで交流と交歓、母校支援などに大きな役割を果たしてきました。会員の高齢化や、組織の面的な広がりや期待できない現状への対応が急務となっていました。

ゆかりの尚志社跡地に建つ会館は、RC造り一部木造平屋建て約七百八十平方メートルという規模です。ステージを備えた多目的ホールでは、年次会の周年記念事業が活発に行われるようになりました。同窓会の各委員会や会合にも頻りに利用されています。

大震災義援金のお願

深志同窓会は、東北・関東大震災被災地への義援金を募集します。正副会長会で急きょ対応を決めました。皆さまのご理解とご協力をお願いします。

だに明らかになっていません。東北、北関東方面で被災した同窓生も多くいるものとみられます。「長く、強く揺れて怖かった。ライフラインがズタズタですが、海側や原発近くの人たちのことを思うと、ぜいたくは言っていないかもしれません。元気で食べ物探しをしています」。震災二日後、宮城県仙台市の牧野

同窓会総会で 勝山氏講演

深志同窓会の平成二十二年度定時総会は昨年九月二十五日、深志教育会館で開かれ、事業の報告と計画案、決算報告、予算案などの各議案が原案通り可決、承認されました。議事では議案のほか支部のあり方や活動費をめぐる討議が行われました。同窓会員による恒例の特別講演は、地方独立行政法人長野県立病院機構理事長を務める勝山努氏(13回卒)が「ピロリ菌と胃がんについて」を語りました。



私が同窓会長をお引き受けしてから、間もなく二年半になります。創立百三十年記念事業の一環として立派な深志教育会館を建設するなど、同窓会の皆さまの強い連帯感と母校愛を感じつつ、責任の重さを痛感しております。

同窓会の皆さまが年次ごとに担当され、母校の生徒に先輩として仕事の様子や、人生経験を語る「尚学

塾」も意義深い事業です。年次総会や各年次で行われる同期会、東京、関西をはじめとする各支部の会合も楽しく、有意義なものであると存じます。

で、近く刊行される予定です。どうぞご期待ください。

えましよう。松本深志高校という伝統ある名門校の卒業生は、経験豊かな知的リーダーとして各界で活躍しています。それだけに親睦と旧懐を越

同窓会への思いと提案

深志同窓会長 中嶋 嶺雄

同窓会をつなぐ絆の意味でも重要なのは、五年ごとに刊行してきた『同窓会名簿』です。いわゆる個人情報

堪えないところですが、問題の一つは若い卒業生の参加が極めて少ないことです。そのためもあって、とかく親睦中心の会合や活動に陥りがちだともい

えて、日常の同窓会活動がグローバル化時代の知的基盤社会(Knowledge based society)にふさわしい地域活動や芸術活動の場であってほしい、と私は考え

ています。会員の皆さまの積極的な提案を待つ次第です。一方、深志同窓会の経常的な主財源は、実は母校新入生が入学時に支払う同窓会費によって賄われています。卒業生も会費を納めることによって、深志同窓会員としての自覚とアイデンティティーも強まるのではないのでしょうか。同窓会が抱える財政問題につきましてもぜひご意見を賜りたく思っております。

(国際教養大学理事長・学長 7 回卒)

同窓会名簿発刊へ

個人情報取り扱い配慮

昭和二十九年、戦後初の深志同窓会の会員名簿が発刊され、昭和五十一年の創立百周年からは、同窓生を結ぶ大切な絆として五年ごとに刊行され、平成十八年の創立百三十周年を迎えました。

昭和二十九年、戦後初の深志同窓会の会員名簿が発刊され、昭和五十一年の創立百周年からは、同窓生を結ぶ大切な絆として五年ごとに刊行され、平成十八年の創立百三十周年を迎えました。

百三十年の歴史の重みを抱えた名簿は前回千ページを超え、これ以上ページ数を増やせば一冊の本としての体裁を保つことが難しいとのこと。巻頭グラビアや、物故者については氏名のみにとどめるなど、割愛すべきは割愛し千ページに収めるべく編集を工夫しています。

当然のことながら個人情報の保護については目隠しラベルによる情報収集や通し番号による購入者の特定など、深志同窓会個人情報管理規定を踏まえ、十分な配慮をしております。

名簿の情報管理はこれまで印刷業者に一任していましたが、安全管理を期し、この四月以降、業者から同窓会事務局へ名簿データの引き渡しを受け、専用パソコンで名簿管理委員会が一括管理することになりました。

母校援助費としての寄付一覧表

平成18年	深志 8回	¥500,000
〃	深志18回	¥500,000
平成19年	深志 9回	¥500,000
〃	深志19回	¥500,000
〃	深志29回	¥500,000
〃	深志40回	¥113,000
平成20年	深志60回	¥317,000
〃	深志 4回	¥500,000
〃	深志10回	¥500,000
〃	深志20回	¥500,000
〃	深志30回	¥500,000
平成21年	深志11回	¥500,000
〃	深志21回	¥1,400,000
〃	深志31回	¥500,000
平成22年	深志12回	¥500,000
〃	深志22回	¥500,000
〃	深志32回	¥500,000

会報17号発行以降教育会館建設に募金を頂いた方

深志24回	武居美智子	(敬称略) ¥20,000
夜中27回	藤村 肇	¥10,000
定時20回	滝田 和男	¥20,000

深志ヶ丘に6年通学 八十路の再会を祝う



松中(松本中学)70回・深志高校2回卒業六十周年記念祝賀会を平成二十二年七月に開催した。卒業時約三百人のうち四十六人の参加を得て盛會裏に行われた。2回生は旧制松本中学へ昭和十九年に入学、昭和二十三年の学制改革により中学四年時に大半は新制深志高校二年に編入されたの

である。従って深志ヶ丘の学び舎へ六年間通学した学年であり、他方旧制高校進学などのため旧制中学四年で卒業したのが松中70回生である(会員名簿松中70回生記事参照)。同期会は卒業以降毎年新年会として開催していたが、八十路を迎え卒業六十周年でもあり、恐らく最後の周年事業にな

るだろうと全国規模での記念行事となった。同窓会事務局によると五十周年記念までは開催する学年は多いが、六十周年を祝う学年は初めてのことだった。同期生の住職によって亡くなった友人たちの追悼法要後、懐かしの学び舎を訪れた。戦前、毎朝登校時に一礼して通った初代小林有也校長の胸像の前に並び記念写真撮影、祝賀会は創立百三十周年記念事業として旧尚志社跡に建てられた深志教育会館で行い、百三十周年記念募金寄付以降初めて来訪の友人へのお披露目をかねた。同所で同期生の現在も活躍している音楽プロデューサー中野雄君の「老いない人生」と題した講演会を開催した。戦中戦後の食糧事情も悪く物資が乏しい中、諸体制が大改革した戦後混乱の時代を支え合いつながりながら過ごした旧友との絆は強く、六十年の空白を一挙に埋め、ともに校歌を斉

唱したり、往時を語り合った素晴らしい会となった。(2回卒・丸山修弘)

深志12回生は平成二十二年六月十八、十九の両日に卒業五十周年の集いを行いました。一日目はゴルフ(三十三人参加)の後、ホテル翔峰を会場とし午後四時三十分より式典、懇親会(百二十五人参加)でした。元音楽部員によるコンサートが始まり、卒業時六組担任の小野朋士先生に出席者全員の点呼をしてもらいました。名前を呼ばれると立ち上がり「ハイ」と返

事をする姿はまさしく五十年前にタイムスリップし、その後の懇親会で旧交を温める良いきっかけ作りができたと思っております。二日目は全員、教育会館へ移動しネパールから送られてきたコーヒを味わった後、学校支援金の贈呈式を行いました。百瀬校長先生より謝辞をいただきました。支援金については同期生全員に拠出をよびかけたところ二百人から応募をいただき五十万円を学校へ、残り五万円を同期生山口貴司君が代表をつとめるネパール難民のNPO支援組織「ブツダ基金」へコーヒのお礼も兼ね贈らせていただきました。その後は尚学塾の十三講座に講師をおくり、それぞれが専門分野での体験談を語り、同期生も現役の後輩と一緒に感銘をうけました。なおこれらの行事のほかに近況報告集「12回卒FOREVER」、同期生誌「行く手遙かに」も発行したことを申し添えます。

以上が五十周年行事の報告ですが、手を握り涙を流して五十年ぶりの再会を喜び合う姿はいまでも忘れられぬ光景です。(12回卒・荻上弘美)

無垢のナラ材で作られたバイオリンやビオラの音色には、粘りと濃厚な味わいがあります。三十周年記念式典で初めて披露され、井筒さんと小学校の同級生だった中嶋嶺雄会長がビオラを演奏しました。無償で製作していただいた井筒さんにはいまも頭の下がる思いでいっぱいです。記憶を宿した旧二棟階段の踏み板は、こうして形を変えて母校に帰ってきました。記念事業を経て、22回生と母校とのつながりは、さらに深くなったように思われます。(22回卒・古幡開太郎)

記念事業で製作され、のちに作られたチェロと合わせて現在、現役諸君が演奏に使っています。

50周年記念事業

平成二十二年十一月二十日に行われた22回生の卒業四十周年式典では、旧二棟の階段に使われていた踏み板で製作したバイオリンとピアノ、チェロによる弦楽四重奏のコンサートを開催しました。併せて同じ踏み板で作ったバイオリン型掛け時計を、記念品として母校に贈呈しました。

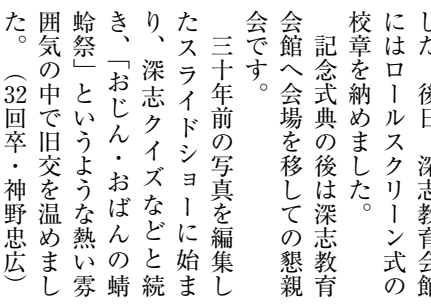
40周年記念事業

節目の調べを奏でた弦楽器は、松本市中山在住のバイオリン製作者、井筒信一さんの手によります。バイオリン二丁とピアノ一丁は、十年前の卒業三十周年

30周年記念事業

深志32回生の卒業三十年記念事業は、平成二十二年十月二日に実施しました。午前中に行った尚学塾特別講座では、女性六人を含む二十二人の代表者が、「十六歳のハローワーク」というテーマで、自らの体験や仕事について在校生に講演

年次会で蜻蛉群舞



支部の集いも活発

◆関西支部◆

約四百五十人が「政治と宗教を議題としない」の伝統を守りながら「楽しい



会」を目指して活動中です。

今年四月のハイキングをはじめ、京都歴史の建造物見学会・新人生歓迎会（六月）、総会・懇親会（十一月）などを計画しています。

行事は幹事会が中心となっており、担当幹事が詳細を詰めます。深志5回卒から46回卒までの年代に加え、最近58回卒という若い人も自薦で幹事に加わりました。幅広い年代の同窓生で幹事会

を構成しています。

新人生歓迎会を四年連続で開催しています。母校先生方の協力で、関西地区への進学者が把握できるようになりました。かつては三年に一度もままならなかった総会・懇親会も年一回の開催が定着しました。

家族での参加も多いハイキングでは、総会などとは違った雰囲気での交流の輪を広げます。何年かかけての大阪湾一周が目標です。（13回卒・有田直之）

◆安曇野支部◆



安曇野市の誕生を契機に、平成二十一年四月に発足しました。母校に近い地元同窓会として会員の親睦づくりのほか、地域の発展や活性化に寄与できる活動を目指しています。

昨年四月から校長を務めております百瀬でございませう。図らずも生徒、教諭、校長と三度目の深志となりました。私が最もお世話になった学校ですので、少し

会、各部OB会など同窓の皆さまには大変お世話になりました。中でも仙台、東京、名古屋、大阪、長野、安曇野の支部総会や、深志十二回、二十二回、三十二

三度目の深志

校長 百瀬 康雄

正面玄関脇に小林有也初代校長の銅像があります。その原作の石膏像が、長らく眠っていた図書館の二階から校長室に戻ってきました。清々しいまなざしと穏やかな表情の石膏像に毎日接しながら、小林有也先生のお人柄をしのび、深志の歴史や精神（こころ）に思いをはせては、日々気持ち

でも思返しができればと思っています。どうかよろしくお願いたします。この一年間、本会、蛭雪

回生の卒業記念行事では、母校への皆さまの熱き思いを肌で感じる機会となりました。物心両面からのご支

援に改めて感謝申し上げます。さて、母校の近況ですが、進路の実現と自治活動への支援の二つを目標に掲げ、職員一丸となって学校

運営にあたっております。進路についてはこの文が活字になる頃には結果が出ています。最近のク



一般公開の講演会を開催しました。安曇野赤十字病院長の澤海明人氏（20回卒）が「地域医療と安曇野赤十字病院の役割」を語り、地元市民など二百二十人が講演に耳を傾けました。二十三年度は近畿大学理事・教授の熊井英水氏（6回卒）の講演「クロマゲロ完全養殖の達成と将来展望」を予定しています。

に参加して交流を深めています。（6回卒・土橋正啓）

財団法人 尚学会について

財団法人深志尚学会は、閉鎖された「尚志社」の財産管理を目的として、昭和二十八年に設立されました。現在、理事長は中嶋嶺雄同窓会長です。

正味財産が二億五千万円以上となる、県立高校関連では県下最大規模の法人です。主な事業は、教育会館の管理及び運営、生徒の学

習活動状況については、剣道部、バドミントン部、棋道部が団体戦で北信越大会に出場、吹奏楽部ではアンサンブルと個人が東海、中部大会に出場するなど、各部が充実した活動を続けております。

伝統的に、生徒たちが主体的に取り組むところに本校の良さがあり、私たち教職員は精いっぱいそれを援助していきたいと考えています。今後も変わらぬご支援をお願い申し上げます。ごあいさつとさせていただきます。（23回卒）

触れ合う魂の確かさ——お力添えに感謝

平成七年の創立百二十周年事業の際、同窓会事務局に勤めさせていただき、無力な私が十有余年もの時を過ごしてこられましたのは、すべての皆さまのお力添えの賜物と心より感謝申し上げます。

小野知子さん（8回卒）退職

したのは、信頼の絆で結ばれた深志同窓会の力強さと温かさ、同窓生の魂の触れ合いの確かさです。百三十周年では通常の記念事業に加えて教育会館建設がありました。財団法人深志尚学会からの幾度も依頼に、皆さまが募金を積

み上げてくださいました。柳澤孝彦氏設計による夢の会館は、後輩のたぬめという皆の思いを結集させて完成したのだと思います。美しい教育会館を誇り、母校と同窓会の一層のご発展を祈念申し上げます。

力向上のための助成などで、収入の大半は、同窓会、年次会からの寄付に頼っています。新たな公益法人制度への対応では、深志高校と関連の強い事業が中心であることから、一般財団法人へ移行する予定です。

教育会館の建設により、貸館事業を行うこととなったため、事業量、必要経費ともに従来とはレベルの違う法人となっております。また、現在の事務処理は、学校事務室を中心に行っています。しかし①独立した財団法人の事務処理に職員が関わることは好ましくありません。

こと②短期間で異動する事務職員では、同窓生の意向を踏まえた継続的な検討が難しいこと③事務室の人員削減が行われた場合、法人の事務自体がストップしてしまう可能性があることなどの理由から、事務処理体制全体の見直しも大きな課題となっております。

教育会館の管理費用は、光熱費など明確に区分できるものだけで年間二百六十万円以上になります。建設の際、多くのご協力をいただいた同窓生各位に改めて感謝申し上げます。維持・運営についても、一層のご理解とご協力をお願いいたします。

深志同窓会のHPをご覧ください

深志同窓会ホームページ（HP）には同窓会の最新情報が掲載されています。そして年次会・OB会・支部のHPにリンクされています。深志同窓会のHPの情報は会員の方々からの投稿・連絡によって更新しています。どしどし投稿・連絡してください。

各年次会のページ（リンク集）

現在深志同窓会HPにリンクされている年次会のページです。

- 東京五嶋会GOLF倶楽部（深志5回生、関東在住会員）
- 深志13回卒同期会
- 深志15回あきつ会
- 深志一六会
- 新一七会ホームページ
- 深志41会（深志18回卒同期会）
- 深志20回卒
- 極楽とんぼ21（深志21回卒）
- 深志高校22回卒業生交流サイト
- 深志23回卒
- とんぼ24会（深志24回卒）
- とんぼ25（深志25回卒）
- 蜻蛉の輪（深志27回卒の仲間）
- 深志高校第28回卒業生
- 深志29回卒の会
- 深志山嶺会（深志30回卒）
- 蜻蛉32会

年次会ごとの行事などを紹介しています。続々と新しい年次会のHPがリンクされています。ぜひ年次会でHPを立ち上げて下さい。HPのない年次会の行事などは深志同窓会HPにできれば写真などを添えてご連絡ください。お待ちしております。

生徒自ら学ぶ意欲育てる

教頭 牧島 晃

10年目の尚学塾



学校週五日制完全実施を契機として、同窓会・PTAの物心両面にわたるご支援により設立された土曜活用講座「尚学塾」も早いもので十年目を迎えようとしています。ここ数年の尚学塾は毎月隔週土曜日の午前を中心に「学力向上講座」「校外模擬試験、同窓生による「特別講義」などを実施しています。

塾は毎月隔週土曜日の午前を凝らした講座を開講しています。これらの発展的な講座は生徒の自ら学ぶ意欲を向上させることに役立つとおり、尚学塾設立の趣意書に謳われた「明日への航路を拓く」という理念を具現化しています。また、例年一年生には尚学塾を利用して「AED使用方法を含む救急救命法講座」も実施しています。

同窓生による「特別講義」は、年次会の周年事業の一環として行われています。平成十七年からは、卒業五十周年と三十周年の年二回実施となりました。昨年実施した六月の12回生と十月の32回生の講座では、多彩な分野で活躍されている三十五人の先輩から学問・職業の意義や内容はもちろん、学生生活の思い出や人生観などさまざまな内容の講義をお聴きすることができました。生徒にとってキャリア形成の糸口となると同時に学びの意義を知ると上や将来について考える上で大変貴重な機会となっています。

さて、平成二十五年度には「新学習指導要領」の実施が予定されています。現在学校ではその対応を喫緊の課題として準備中です。

生徒にとっても増加する学習内容をカバーするため土曜日の充実がますます重要になります。今後も同窓生の皆さまにご協力をお願いします。

蜻蛉抄

十有余年にわたり、同窓会事務局を担っていた小野知子さん(8回)が退職され、新たに事務局に太田松美さん(11回)を迎えました。小野さんの長年にわたるご尽力に衷心より感謝いたしますとともに、

後任の太田さんには事務局長の瀬尾安男さん(5回)ともども同窓会が更に飛躍しますようよろしくお願い申し上げます。

もうひとつの同窓会も盛ん

われら「天馬会」

松中、深志高校陸上競技部OB「天馬会」は昭和三十四年、当時陸上部顧問であった故・上島忠志先生(松中67回卒)によって提唱され創設された。その目的は現役部員の応援団体ではなく、会員相互の交流が第一義である。

通常の活動は、月例の幹事会にて計画実施されているが、年一回の総会、東京天馬会、機関誌「天馬」の発行、現役部員への経済援助などで、四年前からは、近隣の小中学生を募って、「天馬陸上教室」を盛夏に行って、毎回百人超の参加者がある。この指導者から医師まですべて会員で賄えることが大変うれしい。

また二年で創部百年を迎える。幹事会は目下、その実施に向け集中している。その節はまた、多くの関係者、先輩の皆さま、地域の方々のご援助を賜り、盛大な記念式典を催したいと思っている。

バレーボール部 「五色会」

会員名簿には、最初の競技部員から百年になる今日まで、部に在籍した者は、全員収録されている。ちなみに最初の部員は、大正四年の三輪義治さん(松中36回卒)で、九十八年前になる。以来今日まで部員が途切れたことはなく、約八百

人の氏名が残されている。通常の活動は、月例の幹事会にて計画実施されているが、年一回の総会、東京天馬会、機関誌「天馬」の発行、現役部員への経済援助などで、四年前からは、近隣の小中学生を募って、「天馬陸上教室」を盛夏に行って、毎回百人超の参加者がある。この指導者から医師まですべて会員で賄えることが大変うれしい。

また二年で創部百年を迎える。幹事会は目下、その実施に向け集中している。その節はまた、多くの関係者、先輩の皆さま、地域の方々のご援助を賜り、盛大な記念式典を催したいと思っている。



試合を展開しました。どちらも現役生の今後が楽しみな試合でした。

モラル実践のスローガン掲げ



生徒会長 井上 航

二〇一一年度生徒会会長となりました井上航です。現在深志高校では「自治の精神」の形骸化が強く叫ばれています。上下履きの区別の不徹底、各委員会活動への不参加、そして生徒大会の流会などその根柢は多く挙げることができます。

その理由として深志生の受動的な姿勢があると私は考えます。それぞれの活動の重要性などを、提示されてから初めて考えたり、提示されても考えなかつたりする人が増えています。結果、当たり前の行動ができず、モラルが乱れるような

事態になっていきます。そこで私たちは「協同体深志」深志生のモラルを実践しよう」というスローガンを掲げました。上下履きの区別や普段の清掃、委員会活動など本来当たり前である活動を満足にこなせるようにし、その中で一つ一つの活動の意味を一人一人が理解するように努めています。今が「自治」の岐路と考えて、最終的には会員相互に高めあう深志を目指します。

さて、私たちが活動を行っていく中では不可欠な存在となっているのが「深志教育会館」です。そのデザインや環境は素晴らしい、一年生全員の授業のほか、音楽部が定期公演やクリスマスコンサートで使用しているのをはじめ、最近では台湾から来た修学旅行生との交流会でも使用させていただきました。教育会館で交流会を行ったからこそ台湾の方々にも満足してもらえたのだと思います。私たちに誇れる施設です。これからは同窓生の方々や先生方への感謝の気持ちを忘れることなく使用して、深志の更なる発展につなげたいと思っています。

日本中に展開する「トンボ」達。大半は「龍」と化している。その中に毛色の変わった「馬」も飛んでいる。(11回卒・藤森茂幸)

昨年の交流会は、母校体育館に四十二人が参加して開かれました。激励金の贈呈のあと、男子、女子ともに若手卒業生主体のチームが、現役チームと対戦する試合に臨みました。男子ではOBが現役をパワーで圧倒。女子は現役がOGをサーブやアタックで翻弄す

年までも拡大している節目の年次会事業などは、今後の同窓会の一つの方向を示すものと思います。

今回の同窓会報は、瀬尾宏男(5回) 太田松美(11回) 金岩博司(15回) 飯沼博則(16回) 縣治男(19回) 小松芳郎(20回) 伊藤芳郎(21回) 水谷安男(21回) 水野好清(26回) 松澤敬子(27回) 赤澤直徳(40回) 原智之(47回) が担当しました。